

楯無の鎧は
武田家の重
寶なり

目山に入り、力盡きて自刃し、信勝亦た之れに死す、時に三月十一日、信勝年十六、敵兵連りに諸城を陥るれ、遂に進んで新府城に迫りぬ。城壁成らず、守備全からず、所詮敵を防がんやうもあらず。勝頼避けて他に徙らんとす、信勝慨然として諫めぬ。『御先祖國を建て玉ひてより、既に二十八世、四百年に及び候ひぬ、今や衆叛き民離れぬ、何處に往くとしてか免かれ候はん、宜しく重代の旗も焚き、楯無の鎧も焚き棄て、城を枕にして死し候はんこそ然るべけれ』勝頼黙然として答へず。二嬖傍より口を出だしぬ。

『死は易く、生は難し、寧ろ一旦落ち延びて再舉を計り玉ふべし』

勝頼心忽ち動く。去りて小山田義國に頼らんと欲し、妻子を挈げて城を出でぬ、觀るもの皆指ざしつゝ、笑ふ。往きて柏尾に抵れば、義國關を鎖ざして入れず。二嬖先づ亡げ、衆も亦た潰えぬ、勝頼策の出づる所を知らず、終りに去りて天目山に入りぬ、來り従ふもの秋山光次、土屋昌惟以下僅かに四十餘人。土兵俄かに競ひ起り、敵兵を導きて來り迫る。勝頼事の急なるを見て、信勝に告げぬ。『汝は重寶を携へて立ち退き、山道より奥州へ立ち越

小田原は勝頼の夫人の居城北條なり

撰甲の式と鎧の式を著初め

えて再舉を計り候へ」
信勝首を掉りて従はず

「父上こそ小田原に赴かせ玉へ、小子は家名を襲ぎ候もの、此處にて死するこそ當然に候なれ」

勝頼聞いて打ち領づく

「左らば我れと與に討死せよ、去りながら汝は未だ撰甲の式を行はじ、先づ其式を行ふて死するこそ好

れ」

信勝を伴ふて丘上に登れり

鎧親は秋山光次に頼みぬ

式とは云へど唯名のみ、神を祭らん臺もなく、前に飾らん餅もなし、光次楯無の鎧を取つて着せけれども、祝ふ

て酌むべき三献の酒もあらず

兎角して式は終りぬ

敵兵早や既に近づき来る

勝頼丘上より望み見れば、夫人は侍婢と與に自刃して

果てける

「今は是れまでぞ」

勝頼薙刀を揮ふて奮闘し、矢庭に土兵六人を斬つて棄

つ 土屋昌惟袂を控へて諫めぬ

新羅公とは源義光の事

「君は新羅公の後裔に在はしまさずや、匹夫の勇を奮ひ玉ひて、名もなき下郎の手に掛り玉はんこと、此上なき御耻辱に候べし」

勝頼實にもと領けり、鎧を釋きて石に腰打掛け、腹十文字に掻き斬つて打伏しぬ

『我れも後くれ候まじ』

信勝續いて自殺す、光次、昌惟亦た尋で死しける

野史氏曰く、信勝年少と雖も、名を惜み、耻を思ひて復

た命を惜まず、眞に信玄の孫たるに耻ぢず

又曰く、二嬖は遁れて臭名を遺し、光次等は死して美

名を残す、世の少年たるもの、以て鑑戒となすべきなり

黒田長政十六歳にして逃走を肯んぜず

黒田長政小字を吉兵衛と曰ふ、官兵衛孝高の子なり、
天正十二年四月二十日、柴田勝家の將佐久間盛政、豊
臣秀吉の將中川清秀を大岩山の砦に襲ふて之れを
敗る、事不意に出づ、諸砦騷擾、守を棄て、走らんとす、
孝高も亦た一砦を守る、事の危きを察し、其臣栗山四
郎兵衛利安をして長政を具し去らしむ、長政逃走を
肯んぜず、中途より砦に歸りて父と運命を共にす、時
に甫めて十六、之れを侯爵黒田長成の祖とす
大岩山の砦既に陥るぬ、守將中川清秀力盡きて戦死

具すとばお
供する事

吉兵衛とは
長政の事

深慮とは深
い考の事

す 諸寨愕然、策の出づる所を知らず
 孝高亦た一寨を守りぬ
 外には援絶えて、内には兵乏し、大敵若し押し寄せなば
 忽ちにして一敗すべけん
 孝高既に決死の臍を固めぬ、老臣栗山利安を傍近く招
 きて諭しける
 『四郎兵衛、我等の運命も早や極まれり、吉兵衛も與に
 コ、に果てなば、家の後嗣も終に絶ゆべし、先祖への
 不孝此上もあらじ、汝は吉兵衛を具して一先づ此處
 を落ち候へ、幼年の身なれば、假し虎口を避けたりと
 て家の瑕瑾ともなるまじ、世の人は却つて我が深慮

をこそ賞すべけれ』
 流石智謀の孝高も今は他に施さん術とてもあらず
 利安は首を打ち掉りぬ
 『某には冥途の御伴をこそ仰せ付けられ候へ、若殿の
 御伴は何卒餘人に仰せ付けられ候べし』
 勇士は君を棄て、遁れ去らん心なし
 孝高重ねて諭しぬ
 『吉兵衛を無事に立ち退かさんは、コ、に留まりて討
 死せんよりも、我れに對して百倍の忠節なるぞ、時移
 りては叶ふまじ、疾く立ち退き候へ』
 切に促がして止まず
 利安今は争はんと言葉あらず

「左らば仰せに従ひ候べし」
 詮方なく、辭して其場を退き、直に長政を具して砦
 を出でぬ
 行くこと凡そ一里ばかり、銃聲漸やく遠し、前に立てる
 長政は俄かに馬を停めて振り返る
 「銃音の次第に遠ざかるこそ訝かしけれ、四郎兵衛汝
 は我れを伴ふて遁げんとするにはあらずや」
 長政怪みて故を問へり、今は隠すべきやうもあらねば、
 利安は其實を告げぬ
 長政聞くより俄かに氣色を變へける
 「ナニ難を避くる爲めとや、父上を置き參らせて、我れ
 のみ何處へか落ち行かん、武士には逃げると申すこ

長驅とば遠
 方より驅け
 付ける事

とのなきものぞと、常々父上の教へ玉へるにあらず
 や、イザ歸らん、引き返すべし」
 忽ち馬首を回して取つて返す
 「流石は父君の御子かな」
 利安涙を流して感じ入り、又隨ひて砦に還りぬ
 既にして秀吉長驅して來り、援け、忽ち盛政の軍を撃ち
 て粉碎す
 砦乃ち全く、父子亦た無事なるを得き
 野史氏曰く、巧みに退軍するもの亦た戦術の妙所な
 り、然れども我が武人は敵に甲背を示すを以て耻辱
 とし、敢て遁れず、敢て退かず、長政の逃走と知りて直
 に城砦に引き返せるもの、的に是れ武門の本領、武人

の面目

山角定吉十六歳にして主君の首を奪ひ去る

山角定吉は八王子城主北條氏輝の臣なり、天正十八年、豊臣秀吉の小田原を攻むるや、氏輝亦た城に入りて守る、城主氏直の出で降るに及び、氏輝其兄氏政と共に死を賜ふ、定吉痛恨し、氏輝の首を懐いて走り、終に捕へらる、徳川家康其精忠を嘉みし、祿して麾下の豊臣秀吉天下の兵を擧げて、小田原の城を攻む

氏輝八王子より來りて城に入る、定吉も亦た從ひぬ、合圍百日、勢蹙まり、力屈し、主將氏直終に徳川家康の陣に到りて乞へり
『父氏政以下の死を赦し玉は、城を明け渡し候べし』
事許されぬ、氏直乃ち城を致し、家康代りて入て守る
氏政、氏輝出で、醫師安棲の宅に入りぬ、定吉亦從ふ
秀吉忽ち約を變じぬ
『氏政兄弟は剛勇の士ぞ、之れを赦さば虎を野に放つより危うし、若かず禍の根を斷たんには』
石川直清、蒔田正時、中村一氏等を安棲の宅に遣はして死を賜ふ
使者互に顔を見合はせて敢て言はず

使命と使
用事に來
れる使

氏輝早くも其色を察しぬ
『使命の趣、我れ既に察しぬ、暫しの猶豫こそ望ましけれ』

徐かに起ちて沐浴し、歸りて再び座に就く、筆を把りて

辭世の和歌を認めぬ
吹くと吹く風ならばこそ花の春
紅葉の残る秋あらばこそ

氏政も亦た和歌を詠す
あま雲の掩へる月も胸の霧も

兄弟相並び、イザとて刀を腹に突き立つ、介錯人刀を揮

へば、二つの首は前へと落つ

定吉キツト心に思ひぬ

『主君の首を敵に渡さば、必らず路傍に梟されん、好し

好し奪ふて逃げ去らん』
突と立ち上がるよと見る間に、忽ち氏輝の首を抱いて

逃げ出だせり
『ソレ狼藉者ぞ』

人々驚いて跡を追ふ
定吉刀を引き抜き、追ひ來る敵を打ち拂ひくくして逃げ

走る
天翔ける翼なき身は、終に捕へられてヒシくと縛め

定吉無念の切齒を爲しつゝ、城中に引かれて家康の前

に出づ
 家康事の由を聞きて感じぬ
 『臣たるもの、心情左もあるべきぞ、赦し遣はせ』
 命じて縛を解き、終に召し抱へて麾下の列に加へける
 野史氏曰く、氏政兄弟の首終に京師に梟せらる、定吉
 の遺憾果して如何ぞや
 又曰く、事の遂ぐべからざるを知つて尙ほ之れを奪
 ふもの、亦た一片の誠心已むべからざるに出づ、無謀
 として笑ふべからざるなり

驕恣とは我
 儘一杯と云
 事

放恣不遜も
 粗々驕恣に
 同じ

甲賀孫兵衛十六歳にして主君の
 弟を救ふ

甲賀孫兵衛は稲葉正登の侍臣なり、正登の弟式部驕
 恣にして上を凌ぎ、下を侮る、正登屢々訓戒すれども
 悛めず、正登忿怒し、孫兵衛に命じて、之れを斬らしむ、
 孫兵衛諫むれども聽かず、乃ち伴はり諾し、式部を具
 して他に避く、孫兵衛時に年十六
 今、は堪忍の緒も切れぬ、正登孫兵衛を召して命じける
 『式部の放恣不遜なること、汝の知る所の如し、我れ幾
 回か訓戒すれども、露ばかりも悔ひ悛むる心なし、兄
 弟の親も家門の耻辱には換へがたし、汝我が爲に式

積憤とけ積
も積り積もつ
た腹立ちと
云ふ事

部を殺して禍の根を絶ち呉れずや」
 孫兵衛聞くよりハツと驚けり、頓て手を突きて諫めぬ
 「恐れながら君の御胸中左こそと察し奉つり候なれ、
 左れども骨肉の親は天倫の重き所、御穩便の御沙汰
 こそ願はしう候へ、其中には必らず御改心あらせ玉
 ふべし」
 積憤胸に満つる身には、此忠言も耳には入らず
 「汝は腰抜けなればこそ左様なることを申すなれ、汝
 出来ずば、餘人に申し付くるまでぞ」
 正登の氣色極めて悪し、
 若し他人に命せられなば、必ず仰せに従はん、若かじ我
 れ自から行かんにはと、孫兵衛早くも心を決しぬ

「臣を腰抜けと仰せられ候ては跡に引きがたし、イデ
 是れより参り候はん、見届役を付け玉ふべし」
 正登其意に従ひぬ、孫兵衛左らばと見届役を伴ひて式
 部の許に抵れり
 孫兵衛先づ見届役をして中に入つて式部に告げしめ
 ぬ
 「甲賀孫兵衛、君命を承はりて罷り越し候ひぬ、御目通
 りを許させ玉へ」
 君命と聞くより式部早くも其れと察せり
 「オ、左こそ有るらめ、イザ來よ」
 直ちに大刀を把つて書院へ跳り出づ
 孫兵衛少しも慌てず、悠然として入り來れば、式部忽ち

佩刀とは腰にさせる刀の事

ハツタと睨め付く
 『オノレ我れを殺さん爲めに來しよな、近寄らば此刀を喰はすべきぞ』
 聲は顫へ、顔は燃ゆ、殺氣室に満つ
 『距離遠くは聞え候まじ』
 孫兵衛徐に佩刀を脱して後へ推し遣り、膝行しつゝ、式部の前に進めり
 式部此體を見て色稍々解く
 孫兵衛手を下げ、首を低れつゝ述べぬ
 『君、少しく氣を鎮めて聞かせ玉へ、君と殿とは君臣とこそ申せ、正しく御兄弟の間柄に在はし候なり、今日之事某争か本意に候べき、左れども君命是非に及

胸に擬すと
は胸に突き
付ける事

び候はず、免させ玉へ』
 卒然跳り掛りて取つて押へ、懷中より七首を取り出だして其胸に擬しつゝ、徐ろに其罪を數ふ、左右驚き騒げども、救はん由もあらず
 孫兵衛見届役を顧みて告げぬ
 『疾く歸つて殿に申し玉へ、我が腰はまだ脱け候はじ』
 徐かに式部を扶け起す
 『君命は既に果たし候ひぬ、イザ立たせ玉へ、某御伴致し候べし』
 式部を伴ひ出で、跡を山中に潜む
 孫兵衛心を盡して奉養すること數年、式部疾んで歿しぬ

正登聞いて孫兵衛を召し還す

「汝ありたればこそ過ちを遂げざりしなれ、持つべきものは忠義の家來ぞ」

深く其志を感稱しける

野史氏曰く、人を殺すは易く、之を助くるは難し、孫兵衛其易きものを命せられて、難きものを爲せり、義人たる所以、忠臣たる所以、又曰く、今の少年、腰抜けと言はれて憤るものは有り、其腰抜けにあらざる實を示すものは非ず、腰抜けにあらざる實を示すものは有り、而かも其事の道に適ふものは非ず、慎まざるべけんや

矢頭教兼十六歳にして義盟に加はる

矢頭教兼は赤穂藩士なり、字を右衛門七と曰ふ、長助の子なり、十五歳にして長矩に仕ふ、其翌年、會々國難作る、教兼亦た奮ふて義盟に加はる、終に吉良義央の邸を襲ふ、水野忠之の邸に拘はれ、尋で死を賜ふ、教兼御側に召出されてより、僅かに一年、不慮の事變忽ち湧きて、主君は切腹、城地は沒收せられぬ、斯くなるも皆吉良上野介の仕業ぞ、何とて此不俱戴天の讐を報はずして置かるべきや、大石良雄は既に業に志を決しぬ、忠義一圖の面々皆進んで義盟に加はれり

死を賜ふと申す
不俱戴天の讐と云ふ

教兼年少と雖も精忠の心人に譲らず、一念亡君の事に及ぶ毎に、悲憤の涙兩眼よりはふり落つ。良雄の義舉を聞くより争でか躊躇せん、教兼父長助と與に往いて義盟に加はらんことを乞ひける。良雄深く父子の志に感じぬ、左れども教兼の年少なるを憐みて容易に許さず。

『長助殿の儀は無論苦しからず、なれども右衛門七殿まで加盟せらるゝには及び候まじ、特に貴殿は御奉公申してより日淺ければ、寧ろ思ひ止まられ候ては如何に』

言葉穩かに言ひ聞かしぬ。一念凝つては何とて其志を變すべき、教兼頭を左右に

打ち掉れり。『これは御家老の御言葉とも覺え候はず、父既に亡君の讐を報ひんと決心致し候ものを、某假令ひ御奉公せざればとて、何條餘所に見過され候べきや、況してや既に一ケ年も御傍近く仕へ奉りぬ、臣たるの義に於て諸君と異なる所少しも候はず、それとも某年少にして與に同盟に加ふるに足らずと思召し候か、左らば詮方も候はじ、此上は諸君に先だちて死し候はん』

忽ち刀を抜きて自殺せんとす。居合はす人々アヤと打ち驚き、跳り掛りて引き止む。良雄見るよりハラ／＼と涙を濺げり。

『扱て／＼感じ入りたる心底かな、それ程までに思ひ

込るゝものを、何とて拒み申すべきや、左らば血判致さるべし』

今は異議なく承知しければ、教兼欣然として連判に加はりける

赤穂を去りて後ち父長助疾んで歿す、終りに臨みて甲一領を授けて告げぬ

『汝、克く吾が志を成せ、言ふべきとは唯是ればかりぞ』

教兼且つ悲み、且つ憾みぬ

『好し、此上は父上の分をも働らき候べし』

二人の忠義を一身に引受けぬ、吉良邸を襲ふの夜、父の戒名を兜の中に藏めて奮闘し、敵の勇士大須賀治部右衛門を討ち留めける

野史氏曰く、同盟の士四十有七人、大石良金最も年少、教兼之れに亞ぐ、而かも其忠、其義、其勇、其壯、毫も他人に譲らざるなり

又曰く、大野父子は義に背きて臭を百世に遺し、四十七士は義を重んじて芳を千載に傳ふ、去就の擇ばざるべからざること此の如し、思はざるべけんや

安藝の仁三郎十六歳にして
老猪を斃す

享保九年の初秋、安藝國豊田郡戸野村の農夫助右衛門なるもの、田に出で、農事に従ふ、會々一頭の手負

猪駈け來りて助右衛門を傷つく、其子權助年十八、出で、猪を斫る、猪走りて鳴瀬に到り吉兵衛を掛け倒す、其子仁三郎年十六、鎌を揮ふて之れを斫り、終に父と與に撃つて斃す、藩侯錢若干を賜ふて仁三郎、權助の二人を賞す

(上)

助右衛門出で、田に在り、日漸やく傾けども尙ほ還ら
ず
忽ち一頭の老猪あり、砂を蹴立て、猛然として駈け來
る
『ソレ手負猪ぞ』
助右衛門驚き慌て、逃れんとす、猪早くも牙に掛けて

振り倒す
助右衛門の一女傍に在り、アナヤと言ふ間に亦た倒さ
る
折柄、妻水を汲まんとして出で來り、亦た忽ちに掛け倒
さる
助右衛門の子權助暑氣に中りて宅に臥しぬ、父母の危
急を聞くより、疾を忘れて起ち上れり
『ウヌ畜生』
鎌を携へて飛んで出づ
猪、權助を見るより牙を揮ふて突進し來る、勢ひ極めて
鋭し
權助ヒラリと身を換はしぬ、サツと鎌を拂へば斜に猪

の肋を斫る
猪、一散に馳せて鳴瀬に向ふ

(下)

吉兵衛餘念もなく草を刈りつゝあり
猪、疾風の如くに駈け來れり忽ち吉兵衛を牙に掛くれ
ば、筋斗打つて後ろの田に倒る
仁三郎其傍に在り、斯くと見るよりアツと打ち驚く
猪は暴りに暴り、又も吉兵衛を目蒐けて猛進す
仁三郎、今や何かは躊はん、携ふ鎌を揮りつゝ、勢ひ込
で猪の前足を薙ぎぬ
猪、尙ほ怯ます、怒つて仁三郎に突き掛かる
事急なり

猛進とは勢
するどく進
むる事

仁三郎鎌を揮ふの違なし、突然躍つて猪に跨がる
猪、兎ね上りぬ、仁三郎挫と地に落つ、矢庭に立ち上りて
又も猪と引つ組む
猪、益々怒りぬ
仁三郎、曳々聲を掛けつゝ、捻ぢ倒さんとす、熱汗流れて
雨の如し
此時吉兵衛漸やく起き上れり、此體を見るより、是れは
とばかりに打ち驚く
痛みも忘れて駈け來り、イキナリ鎌を把つて猪の頭
を斫る
猪、稍々怯む
仁三郎、忽ち猪を捻ぢ倒す

父打ち、子撃つ、猪終に斃れぬ
 野史氏曰く、子は父を救はんとし、父は子を助けんとす、孝の發する所是れ勇、愛の動く所是れ猛、其れ能く老猪を斃せる所以
 又曰く、今の少年能く犬を打ち、能く猫を逐ふ、知らず又能く老猪に當りて父の危難を救ふの勇ありや

少年武士道 終

明治四十一年三月廿四日印刷
 明治四十一年三月廿七日發兌

少年武士道
 定價金四十錢



著作者

熊田宗次郎

發行者

伊東芳次郎

印刷者

山田英二

發行所
 特約大賣捌所
 特約大賣捌所

東京市本郷區電話下谷一九三八
 本郷一丁目九二番地
 東京市神田區表神保町三
 振替貯金二七〇
 大阪市東區南渡邊町四十三
 振替貯金二八二三

東亞堂書房
 東京堂書店
 杉本書店

大賣捌

(東) 市前川書店、東海堂、文林堂、(京都市) 若林書店、(久留米) 菊竹書店、(弘前市) 今泉書店
 (市) 至誠堂、北隆館、武藏屋、(名古屋) 川瀬書店、(熊本市) 長崎書店、(新潟市) 萬松堂書店
 平、二松堂、(名古屋) 星野書店、(札幌市) 富貴堂書店、(富山市) 福田書店

●五月上旬出來!!!

報知新聞記者 熊田葦城先生著 三浦北峽先生畫

近刊

少年武士道 第二

中判美裝
全二冊二百餘頁
定價四十錢
郵稅六錢

第一少年武士道に收められたる以外の、三十五小英雄を輯む、第一少年武士道を閲讀せられたる諸子は亦必ず本書をも併せ讀むの必要あり。

●五月上旬出來!!!

東亞堂發兌文學書類

高濱虛子先生著 俳諧趣味 全一冊(近刊)

幸田露伴先生著 小春雨集 定價七十五錢 郵稅八錢

佐々醒雪先生序 俳句講話 定價四十錢 郵稅六錢

幸田露伴先生著 潮待ち草 定價八十五錢 郵稅八錢

久保天隨先生序 俳句研究 定價四十錢 郵稅六錢

幸田露伴先生著註 一日物語 定價四十錢 郵稅四錢

沼波瓊音先生序 俳味禪味 定價四十錢 郵稅四錢

楓村居士先生著 樞說 俠雄錄 定價六十錢 郵稅八錢

柳塘僊史先生著 漢詩講話 全一冊(近刊)

高濱虛子先生 外三氏共著 新寫生文 定價五十錢 郵稅六錢

武島羽衣先生序 作歌の葉 定價二十五錢 郵稅四錢

秋元蘆風先生著 シルレル詩集 定價四十錢 郵稅四錢

佐藤仁之助氏著 新百人一首通解 定價二十錢 郵稅二錢

山口小太郎氏序 シルレル鐘の歌評釋 定價七十錢 郵稅四錢

佐藤仁之助氏著 日本文法解義 定價四十五錢 郵稅六錢

德富蘆花先生序 時文評論 理趣情景 定價四十錢 郵稅六錢

東亞堂發兌修養類書

堀内新泉先生著 立志 小説 全力の人 <small>(前篇)</small> 定價六十五錢 郵稅八錢	堀内新泉先生著 立志 小説 全力の人 <small>(後篇)</small> 定價 郵稅	堀内新泉先生著 時間の活用 全一册(近刊) 定價五十錢 郵稅八錢	堀内新泉先生著 人格と運命 定價五十錢 郵稅六錢	加藤咄堂先生著 人格之養成 定價五十錢 郵稅六錢	黑岩周六先生序 加藤咄堂先生著 增補 冥想論 定價五十錢 郵稅八錢	幸田露伴先生序 加藤咄堂先生著 朝思暮想 定價六十錢 郵稅八錢	加藤咄堂先生著 雄辯法 定價五十錢 郵稅各八錢
加藤咄堂先生著 修養 話し草 全一册(近刊) 定價五十錢 郵稅八錢	大内青巒居士序 釋悟庵師著 禪と修養 定價五十錢 郵稅八錢	釋宗演師 渡邊子爵題詞 破覽禪居士著 禪と活動 定價四十五錢 郵稅六錢	破覽禪居士著 偉人修養史 全一册(近刊) 定價五十錢 郵稅八錢	萬朝報記者 茅原華山先生著 世界文明推移史論 定價五十錢 郵稅八錢	木村醫學士校閱 漆山又四郎氏著 腦力養成法 定價四十五錢 郵稅六錢	足立栗園先生著 心的養生法 全一册(近刊) 定價五十錢 郵稅八錢	東亞堂編輯所編 最近男女學校案内 定價五十錢 郵稅八錢

31
482

